

(第一回)

2018(平成30)年度入学試験問題

国 語

(試験時間：50分)

《注 意》

- (1) 問題は ~ まであります。
- (2) 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- (3) 受験番号、氏名を忘れずに記入してください。
- (4) 解答に際して、句読点・符号などが含まれる場合には1字分として数えます。

城 西 大 学 附 属

城 西 高 等 学 校

次の文章は東日本大震災の二年後に書かれたものである。読んで、後の問いに答えなさい。

よく科学は難しいと言われますが、日常私たちが何気なく接している自然や人間ほど難しいものはないわけで、科学はむしろその中から考えやすい、やさしいところをとり出してアツカ^aつていとも言えます。それなのに、^①社会の側では、科学は進歩しているのだから答を出してくれるはずと、自然や人間そのものとも言える地震や病気についての判断（とくに予測）をここに期待し、科学もまたそれに答えようとしてしまうのです。

本書では自然は私たちを超えたものであり、「誰も思っていなかったこと」が起きたのだという事実を踏まえて、科学のありよう、とくに、科学者はどうあらなければならないのだろうかということを考えてみたいと思います。

これからの科学と科学者のありようを考えるに際して、科学や科学技術を「自然の側から」見る必要があるというのがまず考えたことです。二〇世紀の自然科学は急速な進歩をしましたし、その成果を応用した技術の進展もみごとでした。科学や科学技術の歴史として見るとその通りなのですが、「A」自然の側に足場を移して見た時に、私たちがどれだけのことを理解したかと考えると、わからないことだらけです。地震もその一つで、それが起きるメカニズムはかなりわかってきました。が、いつ地球のどこで地震が起きるかを知ることが、今でもとても難しいことであり、それが最も身にしみているのは専門家はずですが、専門家はわからないということがなかなか言えません。

^②震災の直後に多くの人の怒りを買ったのは、科学技術者が思わずもらした「想定外」という言葉でした。科学技術によって物づくりをする時には常に「想定」があります。「B」、ビルを建てる時には、地震や台風などの **1** 災害、火事や電気、^bケイトウの故障などの **2** 災害とさまざまな危険を想定し、それに対する安全対策をするのは当然です。実際には、計算上の危険に対して、その何倍かの事態にも耐え^cうるように、安全率をかけてビルをつくります。そこで、それが ^dコワれるようなことが起きた場合には「想定外」となるわけです。ここには「人間がすべてを制御する」という科学技術、工学の発想があります。さまざまな危険を思い描いている時には、自然がすべて解明されているわけではないことはよくわかっているのに、特定の数字をきめて計算をしているうちに、人間がすべてを設定できるという気分になり、その数字の中で考えるようになってしまうのです。その結果、自分は普通に振舞っているつもりなのに傲慢^{じやうまん}になるわけです。それが多くの人を怒らせたのです。

3

科学技術が自然と向き合っていない。これが東日本大震災で明らかになった問題点です。「想定外」

という言葉に多くの人がどこかイヤな感じを抱いたということを大事にしたいと思います。それは、理性では制御できない事柄が起きた時に、自分の側から考えるのではなく自然の大きさを感じとる姿勢だからです。長い間、自然の中で暮らしてきた人間として当然の姿勢です。「想定外」はそれを離れた言葉なのでイヤな感じがしたのです。科学者、科学技術者といえども人間なので、常にこの感覚を持ち続けなければならないのに、専門家になるとその中でしかものを考えなくなってしまうのです。

③ 近年、研究の中で「選択と集中」という言葉が用いられるようになってからは、ますますその傾向が強くなりました。生命科学でも生きものを見るところから問いを立てるのではなく、ともかくDNAやタンパク質のどれかの物質を大量に分析する、そうすれば何かがわかるという発想で、そこに研究費が集中します。ここにはまったく、「自然と向き合う、そこから問いを立て、考えていく」という姿勢はありません。

本書を、『科学者が人間であること』と題しました。私たち現代人は、そもそも人間は生きものであり、自然の中にあることを忘れがちです。とくに「自然」を研究対象とする科学者が、この「人間は自然の中にある」という感じを失ってよいのだろうかという問いが本書のテーマです。東日本大震災の後、自然が怒っているんじゃないかしらと友人と話し合いました。科学者らしくないと言われるかもしれませんが、自然は人間が制御できるものではなく、もっともっと大きなものであり、私たちはその中にいるのだということを感じたのです。

最初に、三月十一日の地震によって生き方を考えなければならなくなったと書きましたが、実は、科学技術が、「C」それに基盤を置く社会が、自然と向き合わずにきたために起きた問題は、大量生産・大量消費によるエネルギー問題や環境汚染など、日常生活の中ですでにたくさん見られてきました。本当は、日常の中でその課題を真剣に受けとめ、転換を考えなければならなかったのに、^④それを先送りしてきたことが、これほど大きな災害につながってしまったのだという気持です。

(中村桂子『科学者が人間であること』)

問一 部 a のカタカナを漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えなさい。

問二 空欄「A」「C」にあてはまる言葉としてふさわしいものを、次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

ア なぜなら イ そして ウ 逆に エ たとえば

問三 空欄 1 と 2 には対義語が入ります。それぞれ漢字二字で答えなさい。

問四 —— 部① 「社会の側では、科学は進歩しているのだから答を出してくれるはずと、自然や人間そのものとも言える地震や病気についての判断（とくに予測）をここに期待し」とあるが、私たちが「病気についての予測」を「科学」に期待してしまう場面の具体例を考えて答えなさい。

問五 —— 部② 「震災の直後に多くの人の怒りを買ったのは、科学技術者が思わずもらした『想定外』という言葉でした」とあるが、それはなぜか。次のア～エの中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 想定できたはずの危険についても「想定外」という言葉を使い、自らの非を認めない傲慢さがあったから。

イ 計算の結果得られた数字を絶対視してしまい、数字が間違っているかもしれない可能性を考えなかったから。

ウ 予測しきれないのが自然であるのにもかかわらず、人間がすべてを設定できるという考えがあったから。

エ 「人間がすべてを制御する」という発想を用いても、思い描くことができなかった危険があったから。

問六 空欄 3 に入る文章として、ふさわしい順番に並べ替えなさい。

ア つまり自然に対して想定はないわけで、ここで想定外と言うことは許されません。

イ けれど、自然と向き合っていると、もっと小さなことではありますが、いつも思いがけないことに会います。

ウ あの災害が思いがけないことであつたことは確かです。

エ 今年も、もう春だと思っていたら、ある日突然雪に見舞われました。自然とはそもそも思いがけないものなのです。

問七 —— 部③ 「近年、研究の中で『選択と集中』という言葉が用いられるようになってからは、ますますその傾向が強くなりました」とあるが、それはなぜか。次のア～エの中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自然の中で暮らしてきた人間の歴史上、物質を選択して分析することはなかったから。

イ 物質を選んで大量に分析しても、望むような結果が得られないことがあるから。

ウ 分析が終わってから、生きものを見て問いを立てるようになってしまったから。

エ 選択して分析をすることで、自然に存在する生きもの自体を見ることが疎かになるから。

問八 —— 部④ 「それ」の指す内容を四十字以上五十字以内で答えなさい。

問九 本文の内容にあうものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 「人間は自然の中にある」という感覚の欠如が生む問題は、大きな災害に限らず日常生活の中にも多く存在している。

イ 自然と向き合う姿勢が十分でなかったことは反省すべきだが、そのあり方が科学や科学技術の進歩を生んだ側面もある。

ウ エネルギー問題や環境汚染などの増加によって、人々が自然と向き合わなくなったと考えられる。

エ 「想定外」という言葉に対する違和感を持たないことは、自然の中に存在する人間として許されないことである。

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

根気強く交渉したおかげで、会社はやっと、『大渡海』の編集に正式な許可を出した。同時に馬締が、備品の入った小さな段ボール箱を抱えて異動してきた。荒木の定年まで、残すところ二カ月だ。ぎりぎりだが、まにあった。辞書編集部ドア口に現れた馬締を見て、荒木は安堵のため息をついた。

① 馬締を引き抜くにあたっては、根気強い交渉は必要なかった。営業部長は、「まじめ？ ああ、そういうええだったっけね。なに、荒木ちゃん。引き取ってくれるの？」と喜色を浮かべた。担当役員の反応にいたっては、「……だれだ？」だった。

そうか、と荒木は察した。荒木が真剣に口説いたというのに、馬締の反応がいまいちトンチンカンだったのは、だれかに能力を認められることがあるなんて露ほども予想していなかったせいだろう。馬締は営業部員としてまともにカウントされず、名指しで引き抜きをかけなければ、直属の上司にすら存在を思い出してもらえなかったほどののだ。

営業部での評価がかくまで低かった理由も、なんとなく察しはついた。馬締がトンチンカンだからだ。ふつう、会社でいきなり『大都会』を熱唱はしない。

馬締が悪いのではない。会社の見きわめが甘かったために、適材適所の原則を踏みはずしてしまっただけだ。

馬締の、言葉に対する鋭い感覚。持てる知識を総動員して、荒木の問いかけに答えようとする律義さ。律義が行き過ぎてトンチンカンだが、とにかく、辞書づくりのためにあるような才能だ。

荒木が目で指示したのを受け、西岡が立って馬締を出迎えた。

「ようこそ、辞書編集部へ」

段ボールをかすめ取り、馬締を室内へ導き入れる。「人員不足で、机はいくらでも余ってんだけど、こいこいいいか？」

書棚の林立する室内を心細げに見まわしながら、馬締は西岡の隣の机に近づいた。おとなしく、「はい」とうなずく。

「まじめとあ、彼女いる？」

西岡は、恋愛の話をすれば、ひとと親しくなれると思っている節がある。荒木は黙って、奥まった机から馬締の反応をうかがった。

「いいえ」

「じゃ、合コンしよう。セッティングするから、ケータイの番号とアドレス教えろよ」

「持っていないです。営業部で使っていたものは、会社に返してしまったので」

「なんで!?!」

西岡は立ち歩くミイラを目撃したような表情になった。「彼女ほしくないのか？」

「さあ。彼女も携帯電話も、ほしいのかどうか考えてみたことはありません」

西岡が助けを求める視線を超越したので、荒木は噴きだしそうだったのをこらえ、威厳を持って場をとりなした。

「はじめ君、今日はきみの歓迎会だ。六時に『七宝園』しっぽうえんに予約を入れてあるから、仕度して。西岡は佐々木ささきさんを呼んでこい」

『七宝園』の赤い円卓では、すでに松本先生が紹興酒しょうこうしゅを飲んでいた。先生は週に一度、二合だけ飲酒することを自身に許している。飲むあいだもむろん、用例採集カードと鉛筆は手放さない。

荒木は円卓につくと同時に、辞書編集部の人を介して紹介した。

②「西岡は、まあこういうやつだ。それから、こちらが佐々木さん。主に用例採集カードの整理と分類をお願いしている」

荒木に名を呼ばれ、四十代前半の佐々木が無表情のままうなずいてみせた。愛想に欠けるが、実務能力はきわめて高く、辞書編集部になくはならぬ女性だ。最初はパートとしての採用だったが、子育ても一段落したいまは、契約社員として働いてもらっている。

③松本先生が馬締をどう感じるか、二人を引きあわせたときには、さすがに緊張した。松本先生は内心をうかがわせぬ微笑を浮かべ、馬締に軽く会釈したのみだった。

馬締は全員に対して、いちいちぎこちなく頭を下げた。

乾杯が済み、料理が運ばれてきた。西岡はもともと、そのつけない男だ。松本先生のために、さっそく前菜を小皿にとりわけた。先生の苦手なピータンを、ちゃんとよける気づかいを見せている。さて、肝心のはじめ君はどうだろう。荒木は、松本先生の左に座った馬締へ視線を移した。馬締は佐々木のコップにビールをつぎたし、盛大に泡をあふれかえらせたところだった。

がんばってはいるが、惜しい。

荒木はなんだか、幼稚園児を見守る心境になってきた。佐々木も同じ気持ちらしく、無表情のまま鷹揚たかように、馬締に返杯してやっている。

「はじめの趣味って、なんなの」

友好的な関係への道筋を探るべく、西岡が果敢に話題を振った。唇からはみでていたキクラゲを飲みこみ、馬締は少し考えているようだった。

「強しいて言えば、エスカレーターに乗るひとを見ることです」

円卓にしばし沈黙が落ちた。

「楽しいの、それ」

佐々木が平坦な口調で問う。

「はい」

馬締はやや身を乗りだした。「電車からホームに降りたら、俺はわざとゆっくり歩くんです。乗客は俺を追い越して、エスカレーターに殺到していく。けれど、乱闘や混乱は生じません。まるでだれかが操っているかのように、二列になって順番にエスカレーターに乗る。しかも、左がわは立ち止まって運ばれていく列、右がわは歩いて上っていく列と、ちゃんとわかれて。ラッシュも気にならないほど、うつくしい情景です」

「いまさらですが、ヘンですよ、こいつ」

ささやきかけてきた西岡越しに、荒木は松本先生と目を合わせた。松本先生がうなずいた。馬締がなにを言いたいのか、荒木と松本先生にはよくわかった。

ホームにあふれていた人々が、吸いこまれるかのごとく、エスカレーターのまえで整列し運ばれていく。そこかしこに散らばっていた無数の言葉が、分類され、関連づけられて、整然と辞書のページに並び収まるように。

そこに美と喜びを見いだす馬締は、やはり辞書づくりに向いている。

④ いま伝えなければならぬ、という思いに突き動かされ、荒木は口を開いた。

「なぜ、新しい辞書の名を『大渡海』にしようとしているか、わかるか」

馬締は、つまみのピーナッツをリスみたいに一粒ずつかじっているところだった。佐々木が指先で軽く円卓を叩き、注意をうながす。それでようやく、話しかけられているのは自分だと気づいたらしい。馬締はあせった様子で首を振った。

「辞書は、言葉の海を渡る舟だ」

魂の根幹を吐露する思いで、荒木は告げた。「ひとは辞書という舟に乗り、暗い海面に浮かびあがる小さな光を集める。もつともふさわしい言葉で、正確に、思いをだれかに届けるために。⑤ もし辞書がなかったら、俺たちは茫漠まぼろばくとした大海原をまえにたたずむほかないだろう」

「海を渡るにふさわしい舟を編む」

松本先生が静かに言った。「その思いをこめて、荒木君とわたしとで名づけました」

きみに託す。声にはしなかった言葉を聞き取ったのか、馬締は円卓から両手を下ろし、姿勢を正した。

「見出し語の数は、何万語を予定していますか。『大渡海』の特色は。詳しい話を聞かせてください」

⑥ 馬締の目が輝きを帯びている。松本先生は箸を鉛筆に持ちかえ、佐々木は鞆から大学ノートを取りだして広げた。荒木は「よし」と意気込み、新しい辞書の構想を語りだそうとした。

「まあまあ、そのまえに」

⑦ 出端でばなをくじいたのは西岡だ。「こういうときは、まず乾杯でしょうよ」

片手で松本先生のコップに紹興酒をつぎ、もう片方の手で円卓をまわす。ビール瓶が一周し、全員にアルコールが行き渡った。

「では、僭越せんえつながら音頭を取らせていただきます」

西岡はコップをかかげた。「我々辞書編集部ししょへんじぶの船出に、乾杯！」

「乾杯！」
だれからともなく、笑い声がこぼれた。馬締も楽しそうに、松本先生と小さくコップを合わせている。

どうか、いい舟を作ってくれ。荒木は願いをこめて目を閉じた。多くのひとが、長く安心して乗れるような舟を。さびしさに打ちひしがれそうな旅の日々にも、心強い相棒になるような舟を。

きみたちなら、きっとできる。

(三浦しをん『舟を編む』光文社)

※編纂……………いろいろな材料を集めて整理し、書物を作り上げること。編集。

※大都会……………1979年にクリスタルキングという二人組がリリースした曲のこと。当時大ヒットした。

※鷹揚……………ゆったりとしておらかなさま。小さいことにこだわらずおっとりしているさま。

※茫漠……………広くてとりとめのないさま。

問一 傍線部①「馬締を引き抜くにあたっては、根気強い交渉は必要なかった」について、(1)馬締を引き抜こうとした理由が書かれている部分を本文中から五十字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えなさい。また、(2)「根気強い交渉は必要なかった」のはなぜか。説明しなさい。

問二 傍線部②「西岡は、まあこういうやつだ」とあるが、荒木は西岡をどう思うか、次のア～オの中からふさわしいものをすべて選び、記号で答えなさい。

ア 恋愛の話をすればひとと親しくなれると思っっている節があるやつ。

イ そのないやつ。

ウ だれかに能力を認められたことがないやつ。

エ 愛想に欠けるが実務能力は極めて高く、辞書編集部に欠かせないやつ。

オ がんばっているが、惜しいやつ。

問三 傍線部③「松本先生が馬締をどう感じるか」とあるが、松本先生は馬締のことをどのように感じていたか。理由も含めて説明しなさい。

問四 傍線部④「いま伝えなければならぬ、という思いに突き動かされ、荒木は口を開いた」とあるが、荒木は何を伝えようと思ったのか。次のア～エの中からふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 馬締にせひとも辞書編集部に入ってほしいということ。

イ 自分や松本先生が『大渡海』の編纂に向けて、どれほど精力を傾けているかということ。

ウ 馬締の性格がどれだけ辞書作りに向いているかということ。

エ 『大渡海』という辞書がどれほどすばらしい辞書であったかということ。

問五 傍線部⑤「もし辞書がなかったら、俺たちは茫漠とした大海原をまえにたたずむほかないだろう」とあるが、それはどういうことを具体的に説明した次の文の、空欄に入る言葉を本文中から抜き出さなさい。

【もし辞書がなかったら、私たちは ことはできないということ。】

問六 傍線部⑥「馬締の目が輝きを帯びている」とあるが、このときの馬締の気持ちとしてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 荒木や松本先生が思いをこめて名付けた『大渡海』という辞書の名前の由来の奥深さに感心している。

イ 荒木や松本先生が作る『大渡海』という辞書がどれほどすばらしい辞書になるのだろうかとわくわくしている。

ウ 見出し語の数や特色が決まってもいない『大渡海』という辞書について熱く語る荒木や松本先生をさげすんでいる。

エ 荒木や松本先生にとって思い入れのある『大渡海』という辞書の編纂に強く興味を持ち、携われることに心を躍らせている。

問七 本文全体から読み取れる荒木の人物像の説明として適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 定年退職を前にし、なんとか悲願の『大渡海』の編纂に道筋をつけたいと奔走ほんそうしている。

イ 定年退職を前にし、なんとか『大渡海』の編纂に携われる方法がないかと模索している。

ウ 定年退職を前にし、「立つ鳥跡を濁さず」の思いで、なんとか周りに迷惑をかけないで済む方法がないか考えている。

エ 定年退職を前にし、自分の所属している辞書編集部が今まで以上に和気あいあいとやっているように心を砕いている。

問八 本文の表現の特徴を説明したものととして適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 物語が荒木の目線で描かれており、物語全体を通して定年退職を迎える男の悲哀がにじみ出ている。

イ 馬締が社交的な西岡と対照的に描かれることで、その人物像が際立って描かれている。

ウ 西岡の軽薄な様子や佐々木の不愛想さと言った個性の豊かさが、馬締の変人ぶりを和らげている。

エ 『大渡海』や『七宝園』など固有名詞を多く取り入れることによって物語にリアリティーを持たせている。

問九 本文の内容にあうものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 荒木は馬締のあまりのトンチンカンぶりに馬締を低く評価していたが、馬締の辞書作りに対する熱意を確認すると評価を一変させた。

イ 松本先生は馬締を一目見るとすぐさま辞書づくりの才能を見抜き、馬締の辞書編集部入りを歓迎した。

ウ 西岡は馬締と仲良くなろうとさまざまなことを試みるが、馬締となかなか会話がかみ合わず、半ばあきれている。

エ 辞書づくりの才能がある馬締だが、「いちいちぎこちなく頭を下げた」や、「唇からはみでていたキクラゲ」などという描写に今後の辞書編集部での苦難が暗示されている。

次の各問いに答えなさい。

問一 次の〃部が修飾している文節を、例にならってそれぞれ抜き出して答えなさい。

例 赤いドレスを着た少女がステージに上がった。 答え「ドレスを」

- ① 生徒は新幹線で修学旅行先に向かった。
- ② やがて厳しい冬も過ぎ去った。
- ③ 日本で一番高い山は富士山だ。

問二 次の〃部の敬語について、正しいものには○を、誤っているものは正しい敬語に直して答えなさい。

- ① 謹んでおわびをおっしゃいます。
- ② 担当者が説明に参ります。
- ③ 私は、先に召し上がります。
- ④ この本はあなたに差し上げます。

問三 次の慣用表現の「」に入る語をそれぞれ漢字一字で答えなさい。

- ① 自分の欠点を指摘されるのは「」が痛い。
- ② この問題は難しく、「」が立たない。
- ③ 話に「」を差すようなことを言ってはならない。

